

知的障害養護学校での介護等体験に関する調査研究(Ⅱ)

体験学生受け入れ態勢と実施上の課題

武蔵博文・高畑庄蔵*・若山美津彦*・平野隆志*・小林 真・安達勇作

(2000年10月19日受理)

Research into the Experience of the Care at Special School for Mental Handicapped II

The Preparation for Accepting Students and the Problems in Implement

Hirofumi MUSASHI, Syozo TAKAHATA, Mitsuhiko WAKAYAMA,
Takashi HIRANO, Makoto KOBAYASHI and Yusaku ADACHI

E-mail : musashi@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード : 知的障害養護学校、介護等体験、学生受け入れ態勢

Key words : special school for mental handicapped, the experience of the care, the preparation for accepting students

I. はじめに

「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関わる教育職員免許法の特例等に関する法律」が平成10年4月1日から施行された。特例法制定までの経緯、介護等体験の意義、法令等については、すでに高畑・若山・平野・小林・武蔵(2000)にまとめたとおりである。これまで数は少ないが、介護等体験の充実をめざす調査研究が試みられている(例えば、笠原・大野・安藤・河合, 1999; 国立久里浜養護学校, 1999)。今後さらに、介護等体験の実施状況を明らかにし、参加学生の意識とニーズ、受け入れ学校・教員の評価や要望を探ることが求められる。

富山大学教育学部附属養護学校(以下、附属養護学校)では平成11年度より、富山大学教育学部2年生(約160名)を対象に、学生一人当たり二日間の介護等体験を行っている。初年度の介護等

体験の実施に際して、参加学生と受け入れ側の教員それぞれにアンケート調査を実施した。すでに、高畑・若山・平野・小林・武蔵(2000)において、参加学生の介護等体験に対する不安と期待、体験内容への評価、事前指導・オリエンテーションへの評価等について報告した。さらに、若山・平野・高畑・小林・武蔵・安達(2000)では、附属養護学校での介護等体験の内容と体験の1日の流れをまとめ、参加学生の障害児者に対する見方や考え方の変化等を検討した。

本研究では、介護等体験の学生を受け入れた附属養護学校の教員に対して行ったアンケート調査を元に、学生が参加した学校活動、学生の様子・参加態度についての教員側の評価を報告し、介護等体験の実施上の課題や大学側への要望等について検討する。

*富山大学教育学部附属養護学校

II. 方 法

1. アンケート調査の作成

これまで、担当教員や学校の受け入れ方をまとめた先行研究として、笠原ら（1999）と国立久里浜養護学校（1999）がある。その内容や項目については、すでに、高畑ら（2000）において検討したとおりである。今回の教員向けアンケートを作成するに当たり、こうした先行調査研究を参考にしつつ、以下のような点に留意して、調査項目を選択した。

まず第一に、学生が参加した学校活動についての教員の評価を取り上げた。これまでの調査研究では、参加した学生の様子や参加態度について調査している。こうした学生の様子や参加態度は、参加した活動とも関連して取り上げられるべきである。そこで、多くの学生が参加した学校活動から、各学部ごとの活動、全校を対象とする活動、直接に児童生徒とはふれあわない環境整備等のそれぞれについて5段階評定で質問した。さらに、今後、介護等体験で学生に参加してほしい活動についても記述欄を設けた。

第二に、介護等体験として学生を受け入れることに対する教員側の不安について取り上げた。これまでの養護学校免許の取得をめざす教育実習と

は異なる学生を受け入れることを、教員の側がどのように感じ、介護等体験を通じてどのように変化したかを明らかにすることとした。そこで、学生の受け入れに際して不安を感じたか、不安を感じた場合、受け入れを通じて不安が解消したかを質問した。さらに、その理由を問う選択肢を設けて、不安とその解消の要因を探ることとした。

第三に、介護等体験として学生を受け入れることのメリット・デメリットについて取り上げた。笠原ら（1999）の調査でも取り上げられているが、今回の調査では、その理由を問う選択肢を設け、メリット・デメリットの評価の背景を探ることとした。

第四に、事前指導のあり方と大学への要望について取り上げた。事前指導と大学への要望を関連させて取り上げることにより、介護等体験を実施していく上で、運営上の問題点を浮き彫りにすることを意図した。そこで、大学でのオリエンテーションの充実度、介護等体験の事前に習得してほしい内容とその具体的な方法、大学への要望の有無とその具体的な内容について質問した。

2. アンケート調査の内容・項目の選定

以上のような検討をふまえて、Table1に示すようなアンケート調査を作成した。調査項目は、

Table 1 教員向け介護等体験アンケートの調査項目

調査項目	調査内容
1.教員本人について	1.1.性別 1.2.所属学部
2.学生の体験内容についての評価	2.1.小学部 2.2.中学部 2.3.高等部 2.4.全校 2.5.環境整備等
3.受け入れに対する不安について	3.1.不安の有無 3.2.不安解消の有無 3.3.不安解消の理由
4.学生受け入れのメリットについて	4.1.メリットの有無 4.2.その理由
5.学生受け入れのデメリットについて	5.1.デメリットの有無 5.2.その理由
6.体験期間について	6.1.期間の適切さ 6.2.適切と思う日数 6.3.その理由
7.体験実施時期について	7.1.適切と思う実施年次 7.2.その理由
8.学生の参加態度について	8.1.1.積極性の有無 8.1.2.その理由 8.2.1.楽しさの有無 8.2.2.その理由 8.3.1.戸惑いの有無 8.3.2.その理由 8.4.1.教育上不都合な態度の有無 8.4.2.その態度 8.5.1.児童生徒への接し方
9.介護等体験の必要性について	9.1.必要性和参加学生の範囲
10.オリエンテーションについて	10.1.充実度 10.2.必要な内容 10.3.具体的なアイデア
11.体験以前に習得すべき内容について	11.1.習得すべき内容
12.大学側への要望について	12.1.要望の有無 12.2.その内容 12.3.具体的な要望

「1.教員本人について」「2.学生の体験内容についての評価」「3.受け入れに対する不安について」「4.学生受け入れのメリットについて」「5.学生受け入れのデメリットについて」「6.体験期間について」「7.体験実施時期について」「8.学生の参加態度について」「9.介護等体験の必要性について」「10.オリエンテーションについて」「11.体験以前に習得すべき内容について」「12.大学側への要望について」の12大項目、36中項目で構成した（資料）。

3. アンケート調査の実施

1) 調査対象及び回収状況

介護等体験の学生を受け入れた附属養護学校の教員30名（非常勤講師を含む）。小学部所属9名、中学部所属9名、高等部所属10名、養護教諭、管理職各1名である。全員から回答を得ることができた。

2) 調査時期・手続き

初年度の介護等体験（のべ304名、50組）がすべて終了した後、平成11年12月に実施した。今後の介護等体験をよりよく運営するための資料として活用することを説明した上で配布し、期限を設けて提出してもらった。配布及び回収は附属養護

学校教育実習部をお願いした。

Ⅲ. 結果および考察

1. 学生が参加した学校活動についての評価

介護等体験で学生が参加した活動の内容については、すでに若山ら（2000）でまとまっております。そのうち、代表的な活動について、教員側から見て、介護等体験で学生が参加する活動として適当であったか否かを質問した。5段階評価の結果を3段階にまとめ、パーセンテージで示した（Fig. 1）。「最適である」「適当である」を「+」、「どちらとも」を「±」、「不適当である」「全く不適当である」を「-」とした。各学部の活動については教員の所属する学部についてのみ、全校での活動と環境整備等については全員から回答を得た。

小学部では普通日課への参加で「±」「-」の評価が多く、「+」の評価は44.4%（4名）であった。同様な傾向は、中学部、高等部でもみられ、中学部では普通日課と生活単元への参加で「+」の評価はそれぞれ66.7%（6名）に留まった。高等部では普通日課への参加で「+」の評価が55.6%（5名）であった。これらの活動は、すでに日

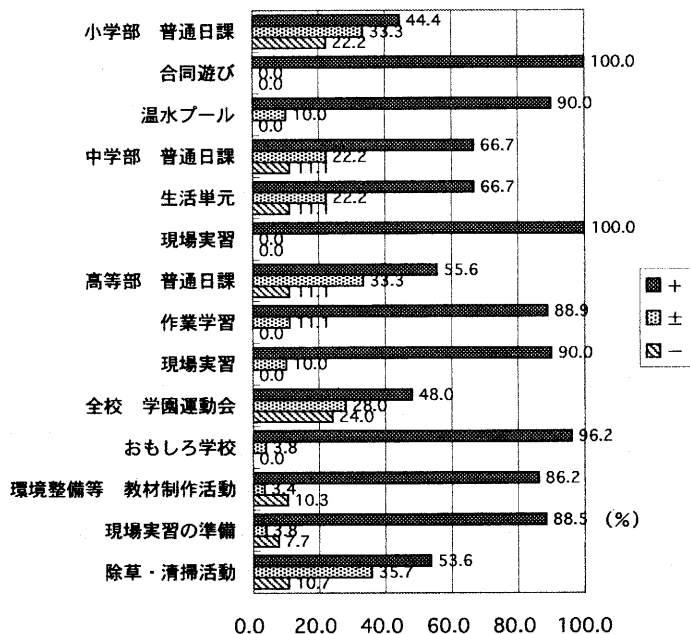


Fig. 1 介護等体験で学生が参加した活動についての評価

常の活動が定まっており、毎回代わる介護等体験の学生が参加できる余地が少ない一方で、学生の方は毎日の日課を十分に理解していないため、消極的な参加になりがちであったと考えられる。

小学部の合同遊び（「+」の評価は100%，10名）、温水プール（「+」の評価は90%，9名）、中学部の現場実習（「+」の評価は100%，9名）、高等部の作業学習（「+」の評価は88.8%，8名）、現場実習（「+」の評価は90%，9名）はいずれも介護等体験の活動として適当であるという回答を得た。これらはいずれも身体を動かす活動であり、活動の見通しを児童生徒、教員、参加学生のいずれもが持ちやすく、活動の結果がすぐにフィードバックされるという特徴を持っている。

今後、介護等体験で学生が参加してほしい活動としては、小学部では歩行会（学校周辺、近隣の森林公園まで散策）をあげる教員が多かった。中学部では班別作業、学部のお楽しみ会、高等部ではボランティア活動（生徒達と学園内の清掃活動等を行う）、学部行事（餅つき大会、学部のチャレンジ大会等）があげられた。

全校による活動では、学園運動会は「±」「-」の評価が多く、「+」の評価は48.0%（12名）であったが、おもしろ学校は「+」の評価が96.1%（25名）と対照的な結果を得た。学園運動会では、競技の間の待ち時間や応援が多く、競技に参加するとき児童生徒への援助の仕方が分からず、児童生徒の行動に振り回されていた。おもしろ学校はモノづくりの活動が中心で、リーダーである教員の指示に従い、児童生徒と参加できた。こうした活動の違いが回答に表れたと考えられる。今後、学生に参加してほしい全校活動には、学習発表会の準備や参加、買い物学習（全校で行うことがある）、大掃除があげられた。

こうした児童生徒と直接ふれ合う以外に、環境整備等の活動も行った。教材制作活動（「+」の評価は86.2%，25名）や現場実習のための準備活動（「+」の評価は88.4%，23名）については適当であるという回答を得た。教材準備等は児童生徒の活動につながっていることが実感しやすく、学生も進んで行ってくれたためと考えられる。こうした準備活動として、季節の飾りつけをする壁面

づくり、おもしろ学校や学習発表会の準備活動等を含めてはどうかという意見もあった。一方、除草・清掃活動は「+」の評価が53.5%（15名）で、「±」「-」の評価も多かった。単純な労働奉仕のようであり、「せっかく養護学校へ体験に来たのだから直接にふれ合う活動がよい。」という意見や「児童生徒といっしょに清掃活動に取り組むのならよい。」という意見が出された。逆に、普段できない体育館のワックスがけ、資料棚の整理、草花の栽培、校内の整備等を行ってほしいという意見もあった。こうした活動も結局は児童生徒のためになるという考えである。

2. 学生の様子・参加態度

教員側から見た学生の参加態度についての5段階評価の結果を3段階にまとめ、パーセンテージで示した。「全くそう思う」「そう思う」を「+」、「どちらでもない」を「±」、「思わない」「全く思わない」を「-」とした（Fig. 2）。

回答した教員（27名）のうち70.4%（19名）は学生が活動に積極的に参加していたと評価しており、75.0%（21名）は学生が活動で楽しそうにしていたと見ている。その理由として「進んで子ども達に関わろうとしていた。」「教材づくりをよくしてくれた。」「朝の挨拶、子どもとの会話ではつらつとしていた。」「給食時間に生徒とふれあい楽しそうであった。」等の意見があった。「-」と回答した教員はいなかったが、全体の約1/4の教員が「±」と回答している。その理由として「学生個人により差が大きかった。」という意見が多く出された。その他にも「一部態度のよくない学生もいた。」「楽しんでいた者、表情の暗い者もいた。」「最初は非常に緊張している様子であった。」等があげられている。

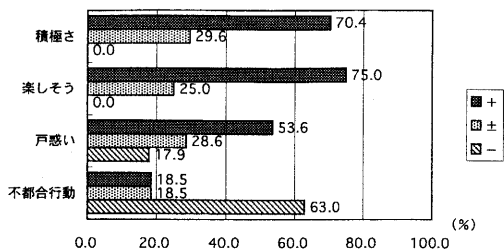


Fig. 2 学生の参加態度

さらに、53.6%（15名）の教員が、学生が活動に参加するときに戸惑っていると回答した。その理由として「子ども達にイヤと言われると関わりを止めてしまう。」「生徒が大きい声で泣いていると驚いていた。」「場所や活動が分からず戸惑っているようだった。」等の意見があった。児童生徒と直接に関わる時に、どのように接してよいか分からずにいることが推察できる。障害ゆえにコミュニケーションがうまくとれなかったり、健常児には見られない行動に戸惑うことができないでいる。「教員側が慣れるに従い、受け入れはスムーズになった。」「子供達と接していくうちに少なくなっていく。」「その場で具体的なアドバイスが必要と感じたが、十分でできなかった。」という意見もあった。教員の側にも、これまでの教育実習での受け入れ方とは違った対応が必要であることが分かる。

学生が活動に参加するときに、児童生徒の教育活動上、不都合な行動が見られたかについて、18.5%（5名）の教員が「+」と回答した。その理由として「活動参加中に、児童生徒と混じることなく、学生同士でおしゃべりをしていた。」を全員があげている。学生の私語は、教育実習等でも問題として取り上げられることがある。学生への指導上の問題としてだけでなく、事前指導の内容や参加する活動の見直し等も考慮して検討を進めていく課題である。

教員から見る学生の児童生徒への接し方について、複数回答で質問し、その結果をFig. 3 にパーセンテージで示した。回答した教員（28名）のうち71.4%（20名）は「話をしていた」「一緒に遊んでいた」とし、46.4%（13名）が「いろいろと

手伝ってあげていた」と回答した。「いろいろ声援を送ってあげていた」「児童生徒をよく見ていた」「児童生徒を誉めてあげていた」という回答も全体の3割近くあった。学生が児童生徒と関わり合い、いっしょの活動を行えたことを、教員の側から見ても前向きに評価できることが分かる。介護等体験として十分な関わりであったかどうかは今後さらに検討の余地ある。

3. 学生を受け入れることに対する不安

これまでの養護学校免許の取得をめざす教育実習とは異なる学生を受け入れることに対して、不安が合ったか否かを問い、さらに不安があったと回答した教員には、初年度の介護等体験を終了した段階で不安が解消したかを質問し、パーセンテージでFig. 4 に示した。解消したかの質問に対して「全くそう思う」「そう思う」を「解消した」、「思わない」「全く思わない」を「変わらない」とまとめて示した。グラフの内周は不安の有無、外周は解消の有無を、関連させて示してある。さらに、不安解消の理由を複数回答で質問し、その結果をのべ回答数でFig. 5 に示した。

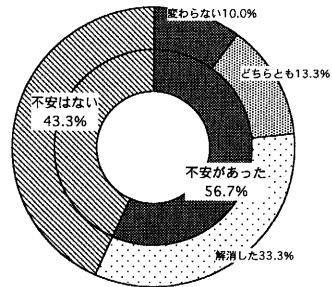


Fig. 4 学生受け入れに対する不安の有無とその解消

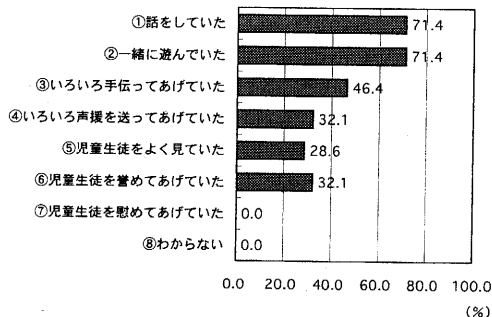


Fig. 3 学生の児童生徒への接し方

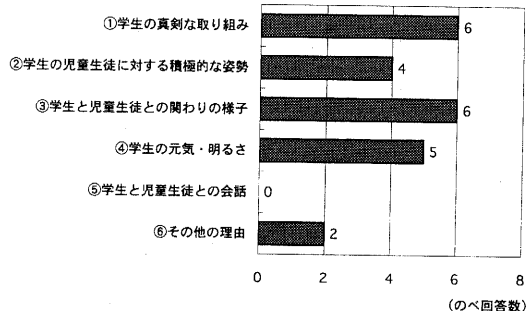


Fig. 5 学生受け入れに対する不安解消の理由

Fig. 4 に示すように回答した教員（30名）のうち、56.7%（17名）が不安があったとしたが、介護等体験を通じて33.3%（10名）の教員は不安が解消した。一方、介護等体験を実施した後も、まだ不安があるとしたのは10%（3名）、どちらでもないとしたのは13.3%（4名）であった。実施後もまだ不安が残った理由は不明である。当初、不安であったという教員が半数以上いたということは、今回の介護等体験の実施が附属養護学校に与えた影響の大きかったことを示している。

不安が解消した理由（Fig. 5）としては、「学生の真剣な取り組み」「学生の児童生徒に対する積極的な姿勢」「学生と児童生徒との関わりの様子」「学生の元気・明るさ」等があり、それらの理由に大差はなかった。学生の様子そのものが不安解消に果たした役割は認められるものの、それ以外の要因が影響している可能性も高いと考えられる。

4. 学生を受け入れることのメリット・デメリット

実際に学生を受け入れたことにより、学校活動や児童生徒にとってメリットあるいはデメリットがあったかをそれぞれ問い、パーセンテージでFig. 6 にまとめて示した。グラフの内周がメリットの有無、外周がデメリットの有無を示す。さらにメリット・デメリットの理由を複数回答で聞き、その結果をのべ回答数でFig. 7 とFig. 8 に示した。回答した教員（30名）全員がメリットがあったと回答した。メリットとデメリットの両方をあげた教員は36.7%（11名）であった。

学生を受け入れることにメリットがあった理由（Fig. 7）としては、20名（メリットがあると回

答した教員の66.6%）が「教育環境整備・教材作成に役立った」をあげている。教員側としては、直接に児童生徒とふれあうことはもちろんであるが、普段十分な人手がなく行うことができないでいる環境整備や教材作成を行えることが、児童生徒への教育活動にもっともプラスになると考えていることが分かる。続いて18名が「児童生徒にとってよい刺激になった」「障害児教育の啓蒙に役立った」と回答し、13名が「教員の負担の軽減につながった」、12名が「学生が児童生徒を理解してくれた」と回答している。

「環境整備や教材作成に役立った」「障害児教育の啓蒙に役立った」「学生が児童生徒を理解してくれた」については、各学部の教員から広くメリットの理由としてあげられた。それに対して「児童生徒にとってよい刺激になった」「教員の負担の軽減につながった」という理由は高等部の教員に多くみられた。高等部の生徒は生活年齢的にも学生と近く、話しことばによるコミュニケーションが可能である者が多いため、学生達との会話が成立した。また、参加した活動が作業学習や現場実習であり、教員の補助をして生徒と取り組みやすかった。それを教員もメリットとして評価したためであろう。

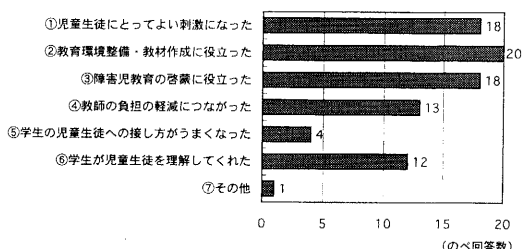


Fig. 7 学生受け入れのメリット

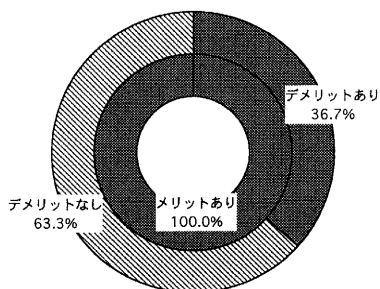


Fig. 6 学生受け入れのメリット・デメリット

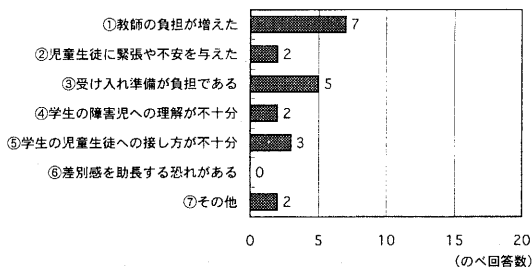


Fig. 8 学生受け入れのデメリット

学生を受け入れることにデメリットがあった理由（Fig. 8）としては、7名（デメリットがある」と回答した教員の63.6%）が「教員の負担が増えた」をあげ、続いて5名が「受け入れ準備が負担である」、3名が「学生の児童生徒への接し方が不十分である」と回答している。これらの回答はいずれも小学部の教員に多くみられた。小学部の児童は話しことばのはっきりとしない者が多く、意思表示の仕方が直接的であるため、学生の多くはどう接したらよいか判断に迷ったと考えられる。見知らぬ学生が入れ代わり参加することで、児童が緊張して落ち着かないこともしばしば生じ、通常の授業の進行を妨げるようになった。こうしたことへの対応はほとんど教員が行わなくてはならない。結果として教員の負担が増えることをデメリットと評価したのであろう。

以上のように、児童生徒の年齢や実態、参加した活動の違い、教員が参加学生に求めるものの違いがメリット・デメリットの評価に反映されると考えられる。学部間、学部内の教員間でも、学生の受け入れに対する評価にかなりの違いがあることが明らかとなった。その他の理由でも、「学生をどう指導したらよいか迷ったから。」という回答があり、各部ごとに受け入れ方について、意見の一致を図っていくことが求められる。

5. 介護等体験の実施方法についての教員の考え

今後も介護等体験を実施していく上での実施方法について、実施期間、実施年次、学生の対象範囲について質問し、介護等体験の必要性について受け入れ側教員がどのように考えているかをまとめた（Fig. 9からFig.11、いずれもパーセンテージで示した）。

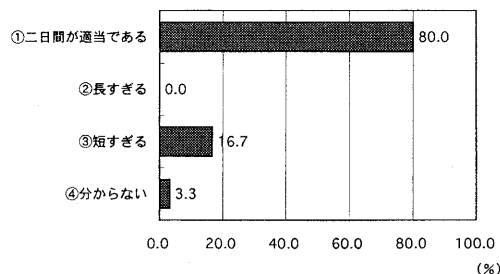


Fig. 9 介護等体験の実施期間

介護等体験の期間（二日間）について（Fig. 9）は、回答した教員（30名）のうち、80.0%（24名）が適当と回答した。160名を越える学生を受け入れるには、「受け入れる側としての限度がある。」という意見や、期間について言及する前に「体験の意義を明確にするのが先ではないか。」という意見があった。「長すぎる」という回答はみられなかった。一方、「短すぎる」という回答は16.7%（5名）で、その理由には「生徒を理解するだけで2日程度かかる。それ以降に生徒と活動をともにすることができる。」「各学部を1日ずつ、その後に全校行事かどれか1つの学部で経験する。」「継続して続けて行う。」等の意見があった。これらはいずれも、参加学生に障害児をよりよく理解してもらいたいという考えのに基づくものである。

介護等体験の実施年次について（Fig.10）は、86.7%（26名）が「2年生（現状でよい）」と回答した。理由としては、「教育実習の前に経験するのがよい。」「教育実習へ問題意識を持って進める。」といった教員養成に関する効果をあげる意見と、「大学生活に慣れて前向きに取り組める時期だから。」「1年生では社会認識が育っていない。」「1年生では落ち着いて取り組めない。」という意見が多かった。

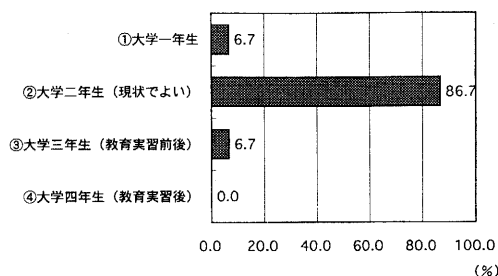


Fig.10 介護等体験の実施年次について

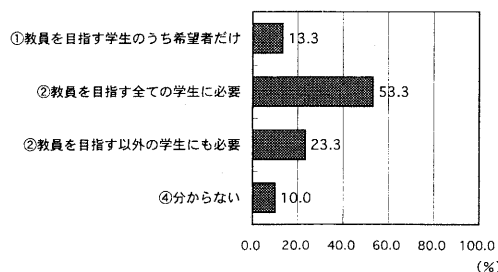


Fig.11 介護等体験に参加する対象学生について

「1年生」という回答(6.7%, 2名)の理由としては「早いほど学生達の選択によい。」「早い時期に障害をもつ人に接してほしい。」という意見であった。逆に「3年生」という回答(6.7%, 2名)の理由には「就職を意識しだす頃が真剣ではないか。」「学んだ知識を体験により具体的なものにすることができる。」という意見があった。

介護等体験を受ける学生の範囲について(Fig. 11)は、53.3%(16名)が「教員を目指す全ての学生に必要」という介護等体験の趣旨にあった回答であった。その一方で23.3%(7名)は教員を目指す以外の学生にも必要と回答し、13.3%(4名)が教員を目指す学生のうち希望するものだけでよいと回答している。教員を目指す以外の学生とは、アンケート項目の表現の曖昧さもあり、どの範囲を指すかのかは、はっきりとしないが、教育学部の学生で教員免許の取得を必ずしも義務づけられていない生涯教育課程、情報教育課程といったいわゆるゼロ免課程の学生を考えたものと解される。

6. 事前指導の内容と大学への要望

大学でのオリエンテーションの充実度についての評価を問い、合わせて大学側への要望の有無を聞き、パーセンテージでFig.12に示した。オリエンテーションは十分であるかを質問し、「全くそう思う」「そう思う」を「充実している」、「思わない」「全く思わない」を「充実していない」とまとめて示した。グラフの内周はオリエンテーションの充実度の評価、外周は大学への要望の有無を、関連させて示してある。さらに、介護等体験の事前に習得してほしい内容と、大学側への要望の内容について質問し、それぞれFig.13, Fig.14にま

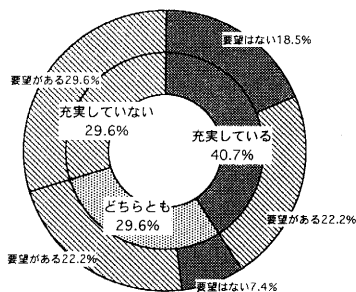


Fig.12 事前指導の充実度と大学への要望

とめた。

Fig.12に示されたように、大学でのオリエンテーションが充実しているという回答が40.7%(11名)あり、充実していないという回答(29.6%, 8名)をかなり上回った。にもかかわらず、大学への要望は、オリエンテーションが充実していると回答した者の半数以上、充実していないと回答した者は全員が「ある」と回答している。このことは、限られた時間内で行わなくてはならないオリエンテーション自体はプラスに評価しているが、介護等体験として学生を受け入れるには十分ではないという意見として捉えることができる。

介護等体験として、養護学校での体験に参加する事前に習得してほしい内容(Fig.13)としては、19名(回答した教員の70.4%)が「障害児との接し方」「学校現場における基本的マナー」をあげ、13名が「介護等体験の意義」をあげている。具体的な方法としては、「パンフレットを基に講義を聴く。」「ビデオで授業風景など見せながら説明する。」「ビデオなどで紹介し感想を書かせる。」「障害の理解が不十分なのは仕方がないが、挨拶など

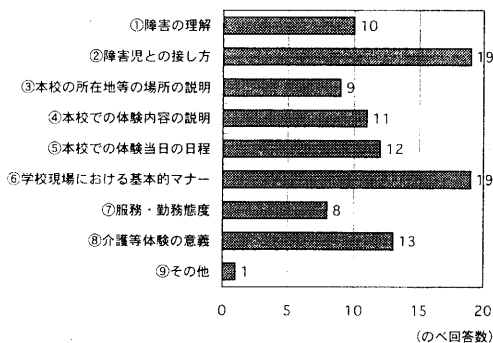


Fig.13 介護等体験の自然に習得してほしい内容

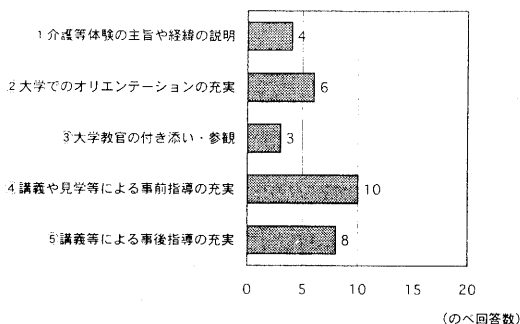


Fig.14 大学側への要望する内容

マナーは徹底する。」という意見があげられた。

現状は、大学での全体オリエンテーションは約1時間であり、内容は附属養護学校の概要、障害児への対応の仕方、介護等体験の実施要項の説明である。その多くを、介護等体験の実施手続きの説明に費やしており、障害児への対応については何かあったり困ったときに勝手な判断をせずに報告・相談することという受け身の・予防的な対応の説明に留まっている。

これまで本論で検討した、学生の参加態度や受け入れのメリット・デメリットの項目であきらかとなったことと合わせると、接し方と基本的マナーは、受け入れる教員側として、まず習得してほしい内容であることは理解できる。こうした基本的な部分が明確にされないまま、介護等体験が行われていくことは今後、大きな問題になると可能性さえある。

介護等体験を実施する上で大学側への要望（Fig.14）としては、10名（回答した教員の50.0%）が「講義や見学等による事前指導の充実」をあげ、8名（40.0%）が「講義などによる事後指導の充実」をあげている。具体的に書かれた要望にも「体験したことを深めるように指導してほしい。」「貴重な体験を生かせるよう事前事後指導の充実を望む。」という意見があげられた。

現状では、事後の指導はほとんどなされておらず、介護等体験の経験をその後の教育カリキュラムにどのように生かしていくのか不明である。受け入れ側である附属養護学校の教員の方々の意見を真摯に受けとめて、検討していく必要がある。

IV. まとめ及び今後の課題

平成11年度に本学教育学部において始めて実施した介護等体験について、学生を受け入れた附属養護学校の教員を対象としたアンケート調査の結果を報告・検討した。その結果、以下のような点が指摘できる。

まず、学生が参加した学校活動についての評価では、各学部とも普通日課への参加の評価が低かった。これらの活動は、すでに日常の活動が定まっており、学生が参加できる余地が少なく、消極的

な参加になりがちであったと考えられる。その一方、小学部では合同遊び、温水プール、中学部の現場実習、高等部の作業学習、現場実習はいずれも高い評価を得た。これらは身体を動かす活動であり、学生が活動の見通しを持ちやすく、活動の結果がすぐにフィードバックされるという特徴を持っている。

次に、学生を受け入れることに対する教員側の不安については、教員の半数以上が不安であったと回答した。今回の介護等体験の実施が附属養護学校に与えた影響の大きかったことを示された。学生の様子そのものが不安解消に果たした役割は認められるものの、それ以外の要因が影響している可能性も高く、不安の要因とその解消の理由についてははっきりとしなかった。

さらに、介護等体験に学生を受け入れることのメリット・デメリットでは、直接に児童生徒とふれあうことはもちろんであるが、普段十分な人手がなく行うことができないでいる環境整備や教材作成を行えることが、児童生徒への教育活動にもっともプラスになるという考えが示された。また、メリット・デメリットの評価には、児童生徒の年齢や実態、参加した活動の違い、教員が参加学生に求めるものの違いが反映され、学部間、学部内の教員間にもかなりの違いがあることが明らかとなった。今後、各部ごとに受け入れ方について、意見の一致を図っていくことが求められる。

事前指導のあり方と大学への要望については、障害児への接し方と学校現場における基本的マナーをまず習得してほしいという意見が多く示された。これは学生の様子・参加態度を反映するものといえる。学生が児童生徒と関わり合い、いっしょの活動を行えたことを、教員の側も前向きに評価している。しかし、多くの学生に戸惑いの様子が見られ、児童生徒と直接に関わる時に、どのように接してよいか分からずにいることが示された。また、活動参加中に、児童生徒と混じることなく、学生同士でおしゃべりをしていったという指摘もなされている。事前指導、介護等体験中にどのように学生を指導していくのか、今後、介護等体験を実施していく上で大きな検討課題といえる。

今回の調査結果に基づき、すでに平成12年度よ

り、事前指導の資料として、「附属養護学校版 介護等体験ガイドブック」を作成して、大学でのオリエンテーションの改善を図っている（高畑ら、2000）。学生の受け入れ態勢の明確化、学生が参加する活動内容の見直し等が、附属養護学校の教育実習部を中心としてなされている。介護等体験が教員養成にとり有意義なものとなるように今後も検討を続けていく必要がある。今回は、介護等体験のうち、附属養護学校での体験にのみ限って検討した。これに前後して行われる社会福祉施設等での体験との関連など、まだまだ検討しなくてはならない問題が山積していると考ええる。

謝 辞

本研究に関して、中井 学 校長をはじめ富山大学教育学部附属養護学校の先生方に多大な協力を得ました。ここで深く感謝申し上げます。

文 献

- 笠原芳隆・大野由三・安藤隆男・河合 康（1999）
特殊教育諸学校における介護等体験学生受け入れ体制と実施上の課題. 上越教育大学紀要, 18 (2), 459-469.
- 国立久里浜養護学校（1999）養護学校における介護等体験の実際. 国立久里浜養護学校.
- 高畑庄蔵・若山美津彦・平野隆志・小林 真・武蔵博文（2000）知的障害養護学校での介護等体験に関する調査研究：調査概要及び事前指導のあり方 富山大学教育学部研究論集, 3, 45-54.
- 若山美津彦・平野隆志・高畑庄蔵・小林 真・武蔵博文・安達勇作（2000）知的障害養護学校における介護等体験に対する学生の意識調査 富山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 1, 45-50.

富山大学教育学部附属遠達養護学校
教育実習部

介護等体験(教官向け)アンケート

教字に○をつけください。なお、本音でお書きください。
配布日：平成11年12月20日
(回収日：平成12年1月7日 各学部実習部まで)

あなたの性別、学部所属等は？(男・女)(小・中・高・他)部
介護等体験では、それぞれの活動内容がどのくらい適当であったと思いますか？
あなたの該当する活動内容について、下記の①から⑤までの番号を、全ての()に
お書きください。

① 最通である	② 適当である	③ どちらとも	④ 不適当である	⑤ 全く不適当
<学部>				
○温水プール()	○合同遊び()	○普通日課()		
今後、やってほしい活動内容を3つお書きください(今年度内容含む可)。	> <③>			
<①>				
<中学部>				
○現場実習()	○生活單元学習()	○普通日課()		
今後、やってほしい活動内容を3つお書きください(今年度内容含む可)。	> <③>			
<①>				
<高等部>				
○現場実習()	○作業学習()	○普通日課()		
今後、やってほしい活動内容を3つお書きください(今年度内容含む可)。	> <③>			
<①>				
<全校>				
○学園運動会()	○おもしろ学校()			
今後、やってほしい活動内容を3つお書きください(今年度内容含む可)。	> <③>			
<①>				

環境整備、準備活動などは、学生にとって適当な活動だったと思いますか？

① とても適当	② 適当である	③ どちらとも	④ 不適当である	⑤ とても不適当
<から選んで、カテゴリー内にお書きください。>				
○現場実習の準備活動()	○教材製作活動()			
○除草・清掃活動()				
今後、やってほしい活動内容を3つお書きください(上記内容含む)。	> <②>			
<①>				

あなたは、学生を受け入れるに当って、不安がありましたか？
① あった ② なかった

「①不安があった」と答えた方にお聞きします。あなたの不安は、今年度の介護等体験での学生の取り組みを見て、解消されましたか？

- ① 全くそう思う ② そう思う ③ どちらとも ④ 思わない ⑤ 全く思わない

「不安が解消された」理由は、どれですか？(複数回答可)

- ① 学生の真剣な取り組み ② 学生の子どもたちに対する積極的な姿勢
③ 学生と子どもたちの関わり方 ④ 学生の元氣・明るさ
⑤ 学生と子どもたちとの会話
⑥ その他()

学生を受け入れてメリツツがありましたか。

- ① あった ② なかった
「①あった」と答えた方にお聞きします。その理由を下記から選んでください。(複数回答可)

- ① 児童生徒にとってよい刺激になった。 ② 教育環境・教材作成に役立った。
③ 障害児教育の啓蒙に役立った。 ④ 教師の負担の軽減につながった。
⑤ 子どもへの接し方がうまくなくなった。 ⑥ 子どもを理解してくれた。
⑥ その他()

学生を受け入れてデメリットがありましたか。

- ① あった ② なかった
「①あった」と答えた方にお聞きします。その理由を下記から選んでください。(複数回答可)

- ① 教師の負担が増える。 ② 児童生徒に緊張や不安を与える。
③ 受入準備が増える。 ④ 学生の障害見理解が不十分である。
⑤ 学生の児童生徒への接し方が不十分である。 ⑥ 差別感を助長する恐れがある。
⑦ その他()

あなたは、養護学校での体験の期間(二日間)についてどのように思いますか。

- ① 適当である。 ② 長すぎる。 ③ 短すぎる。
「長すぎる」「短すぎる」と答えた方にお聞きします。適当な日数及び、その理由を下記にお書きください。

「期間」()

あなたは、「介護等体験」を何年生頃、実施すればよいと思いますか？

- ① 大学1年生 (現状で良い)
② 大学2年生 (教育実習の前夜)
③ 大学3年生 (教育実習の後)
④ 大学4年生 (教育実習経過後)

「介護等体験」の実施時期を選んだ理由を下記にお書きください。

あなたから見て、学生は積極的に参加していたと思いますか。
① 全くそう思う ② そう思う ③ どちらとも ④ 思わない ⑤ 全く思わない
具体例・感想等がありましたら、下記にお書きください。

あなたから見て、学生は楽しんで参加していたと思いますか。
① 全くそう思う ② そう思う ③ どちらとも ④ 思わない ⑤ 全く思わない
具体例・感想等がありましたら、下記にお書きください。

あなたから見て、学生は戸惑っているように見られましたか。
① 全くそう思う ② そう思う ③ どちらとも ④ 思わない ⑤ 全く思わない
具体例・感想等がありましたら、下記にお書きください。

あなたから見て、学生は教育上不都合な行動をとったと思いますか。
① 全くそう思う ② そう思う ③ どちらとも ④ 思わない ⑤ 全く思わない

不都合な行動をとったと思われた方にお聞きます。具体的には？（複数回答可）

- ① 児童・生徒にかかわらなかつた。
- ② 児童・生徒に触れようとしなかつた。
- ③ 学生どうしでおしゃべりをしていた。
- ④ 教師への連絡や相談がなかつた。
- ⑤ 教師の指示に従わなかつた

学生は、今年度の体験で児童・生徒とどのように接していましたか？（複数回答可）

- ① 話をしていた。
- ② 一緒に遊んでいた。
- ③ いろいろ手伝ってあげていた。
- ④ いろいろ声援を送ってあげていた。
- ⑤ 子どもたちをよく見つめていた。
- ⑥ 子どもたちの取り組みを誉めてあげていた。

教員免許状を取得しようとする場合、特殊教育の教員を目指す人以外にも「介護等体験」が必要になりましたが、これについてどう思いますか？

- ① 必要がない
- ② 希望者だけでよい
- ③ 免許状を取得する以外の人にも必要
- ④ わからない
- ⑤ 教員を目指す全ての学生に必要

学生は、大学において約30分間、養護学校教育についてのオリエンテーションを受けています。内容は、本校の概要説明、障害児への対応、実施事項についてです。学生への事前指導は十分だと思いますか？

- ① 全くそう思う ② そう思う ③ どちらとも ④ 思わない ⑤ 全く思わない

不十分だと思われた方（③～⑤）にお聞きます。何をどのように充実すればよろしいと思われますか？（複数回答可）

- ① 障害の理解
- ② 障害児との接し方
- ③ 本校の所在地等、場所の説明
- ④ 本校での体験内容の説明
- ⑤ 体験当日の日程、動き
- ⑥ 学校現場における基本的なマナー
- ⑦ 服務・勤務態度
- ⑧ 介護等体験の意義
- ⑨ その他

具体的なアイデアがありましたら、お書きください。

事前に習得すべき内容として適当なものを選びから選んでください。（複数回答可）

- ① 障害の理解
- ② 障害児との接し方
- ③ 本校の所在地等、場所の説明
- ④ 本校での体験内容の説明
- ⑤ 体験当日の日程、動き
- ⑥ 学校現場における基本的なマナー
- ⑦ 服務・勤務態度
- ⑧ 介護等体験の意義
- ⑨ その他

大学側への要望はありますか。

- ① ある
 - ② ない
- 「ある」と答えられた方は、その理由を選んでください。（複数回答可）
- ① 介護等体験の趣旨や経緯の説明
 - ② オリエンテーションの充実
 - ③ 大学教官の付き添い
 - ④ 講義等による事前指導の充実
 - ⑤ 講義等による事後指導の充実

大学への具体的な要望がありましたら、下記にお書きください。

貴重なご意見をありがとうございます。今後の実践に反映させていただきます。